

学習ピアサポートシステムの軌跡

教育推進総合センター

濱田 陽・細川 和仁

The Development of Peer Support System

Yo HAMADA · Kazuhito HOSOKAWA

概要：「学生による学生のための学習ピアサポートシステム」が始まって8年が経過した。様々な試行錯誤の繰り返しにより、現在のシステムが確立した。平成26年度の学部改組・新学部設立を控え、本稿では、これまでのピアサポートの軌跡を振り返り、報告することとする。

1. はじめに

「学習者中心の教育」を基本方針とする現在の秋田大学の基本方針に沿った「学生による学生のための学習ピアサポートシステム」（以下ピアサポとする）が始まってから、8年が経過した。学部改組を控える今、現在の仕組みにおいて、どのような背景で本システムが誕生し、どのような過程を経て現状にたどり着いたのかを振り返る。そして、今後、変遷し続ける大学教育の中で、どのような方向にシステムが向かっていくべきかを議論する。

2. 学習ピアサポートシステムとは

2-1. ピアサポの理念と背景

秋田大学教育推進総合センターにおいてピアサポが導入されたのは平成18年度からである。本学のピアサポの目的は大きくは2つあり、①新入生の学習活動の支援を通じて、大学における教育・学習への適応を促すこと、②入学後の学習上の障壁をできる限り取り除き、秋田大学における学習への意欲を高め、維持させるようにすることである。この目的を達成するために、教員の指導体制やカリキュラムを整備することに加え、それを補完する支援体制を充実させることを目指している。

ピアサポが主に初年次学生を対象にしていることから、「高校から大学への移行」及び「初年次教育」という観点からこのシステムについて考察

することが有効だと考えられる。

(1) 高校から大学への移行 (transition)

まず「高校から大学への移行」について検討する。教育学において「移行」は重要な研究課題である。子どもが大人へと成長していくプロセスは、「異なる社会組織間の、そして発達段階間のトランジション（移行）の過程」（耳塚・牧野，2007，「まえがき」）と捉えることができる。社会の構造の変動によって、このトランジション自体が多様になっているため、そのプロセスを探究することは教育学の重要な課題の一つだと言える。

様々な移行場面の中で、高校から大学へのトランジションも大きな問題をはらんでいる。その背景には、第二次ベビーブーム以降の18歳人口の減少に伴う大学進学率の上昇と、大学入学者の多くが高校卒業後数年以内に進学してきているという、日本の高等教育に特徴的な状況がある。

大学進学率の上昇によって、入試による選抜機能が徐々に働かなくなり、これまでどちらかと言えば真正面から取り上げられることのなかった、高校と大学の教育・学習面での接続性が問い直されるようになってきている。具体的には、高校までの学習が十分に修得された状態で大学に入学しているかが問題となっており、十分に修得できていない場合は学生の自己責任とするのではなく、大学側が補修教育をおこなうという形が生まれている。

現在、大学は教育体制のシステム化によって、

この状況を乗り切ろうとしている。目標、内容、評価のしくみを厳密化し整合性を高めることによって、より精緻な教育体制が構築できる反面、過度のシステム化が、大学の「(近代)学校化」と呼ばれるような状況をもたらしている。

田中毎実はこのような状況を打破する手がかりとして、「学習の共同化や相互性化という形で脱学校化が求められている」と指摘している(田中, 2002)。

教育システムの整備によって、大学教員と学生との関係性を「指導する／される」という形で明確化するのではなく、学生同士の協働や相互作用を通じて、学び合う場を構築しようというものである。学習科学の分野で協調学習が支持されていることから、学ぶ場としてのコミュニティ形成が大学教育として重要なカギを握っており、そのことはピアサポ構築の背景にあると考えられる。

(2) 秋田大学における初年次教育

一方、高校と大学の移行問題を解決するアプローチとして、アメリカの例にならい、日本においても大学における「初年次教育」を充実させるという方向性が1990年代から続いている。

初年次教育とは、高校(と他大学)からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を「成功」させるべく、主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム(濱名, 2004)を指す。その中には、正規の授業科目によって構成される教育課程だけでなく、授業時間外の学習を支援する環境も含んでいる。

秋田大学の正規の授業科目に関しては、平成10年度に教育課程の改革がおこなわれ、その時に策定された教育課程の枠組みが、基本的には現在まで継続している。初年次教育に関する方針は、各学部・学科等で定められる履修基準によって、1年次にどのような科目を配当しているかによって推察することができる。現在の必修科目としては、教養教育科目としての「初年次ゼミ」、「大学英語」、基礎教育科目として物理や化学等の理科系科目や情報処理関連の科目が配当されている。

その中で「初年次ゼミ」は、大学での学習や生活のオリエンテーションとケアを目的として開講されており、各学部・学科・課程の単位で実施さ

れている。当初の目的としては、表1のような理念があった(秋田大学改革関連資料集編集委員会, 1999)。この表の④⑤に指摘されているように、多様性を増した入学者に対して指導以前にケアをするという意識を持ち、それぞれの学生が学習に対する意味づけをおこなえるよう支援していくことが目指されている。

表1 初年次ゼミが当初想定していた目的

<p>学部の専門教育と教養教育とを関連付け、学部の理念や目的に基づき、入学生の大学生活での指針や方法論の涵養、あるいは学生の入学の目的をより鮮明化するための環境を提供する。この範疇の授業内容として、以下の様な具体的な目的を考えている。</p> <p>①大学での生活・学習の基本的な方法と考え方についてのオリエンテーション、</p> <p>②大学生活での必須の要件である報告書の作成を念頭に入れた発表・討議できる能力の涵養、</p> <p>③自らの意識に基づき、問題の発見、解決への計画と立案、資料の収集と分析およびそれをまとめる能力の涵養、</p> <p>④多様な入学者への「ケア」を通じた教官と学生の相乗的意志の疎通、</p> <p>⑤自ら選び入学した意義と目的の深化</p>

2-2. ピアサポの導入

本学におけるピアサポは、前述の初年次教育を一層充実させるため、特に「初年次ゼミ」との関連づけを意識して立ち上げられた。ピアサポが導入された背景には、学生が高校から大学への移行において抱く不安やつまづきをいかにして乗り越えさせるかという問題意識があった。例えば、教養基礎教育の授業評価調査の結果を見ると、授業内容が理解できなかった場合の対応方法として、図1のような結果が得られている。ここでは平成17年度と平成22年度の結果を表示しているが、ここでの選択肢のうち、「授業の内容が理解できなかったときの対応」として最も選ばれたのは、「先輩や友人に質問したり一緒に勉強したりした」であった。平成17年度が32.7%、平成22年度が35.4%となっている。一方、「教員に質問した」は10%前後にとどまっている。教員は授業時間外にもオフィスアワーを設定して質問を受けつける体制を整えてはいるが、実際に研究室を訪ねるのは敷居が高く、ここで挙げられた選択肢の中では最

も低い割合となっている。学生が学習につまずいた場合、身近な学生に頼る傾向があることがわかる。平成17年度と平成22年度の結果を比較すると、「教員に質問した」の他に「テキストや参考

書などで調べた」も割合が下がっており、逆に「先輩や友人」の他に「インターネットを利用して調べた」の割合が上昇しており、近年の学生の学習スタイルの傾向を読み取ることができる。

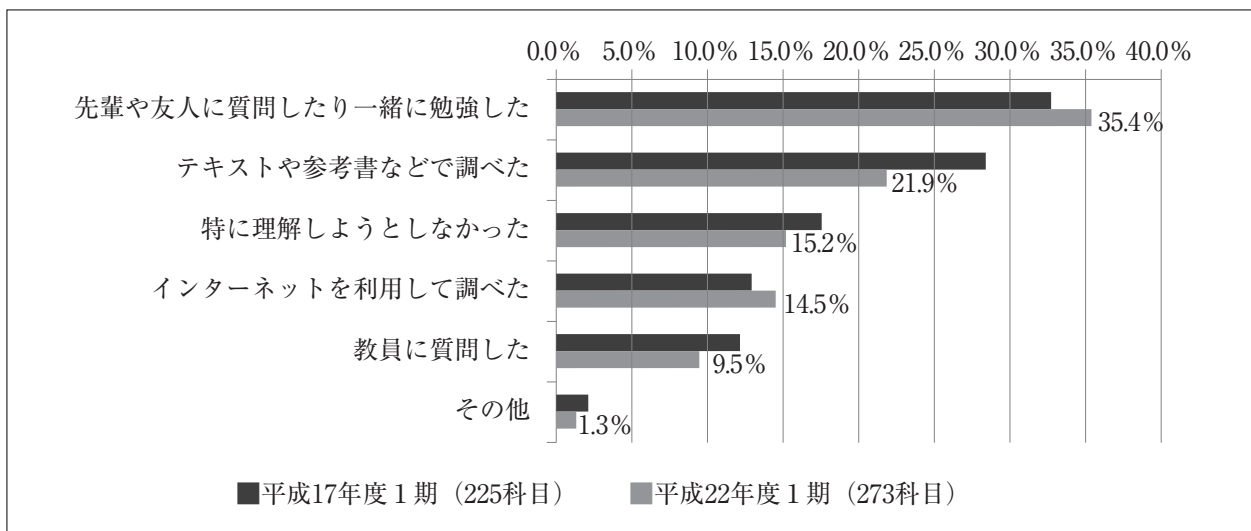


図1 授業の内容が理解できなかったときどのように対応したか

学生が高校から大学への移行において様々な課題を抱えながらも、学習意欲を失わずに継続的に学ぶためには、学生個々の努力もさることながら、学ぶ場としてのコミュニティ形成が重要であると考えられる。そのコミュニティづくりに寄与するものとして、後輩が先輩に相談できる場を公式に設定するピアサポが整備された。

もう1点、やや文脈は異なるが、授業評価が各大学で広く実施されるようになるにつれ、学生を教育・学習環境の改善に参加させる傾向が強まってきたことも、ピアサポ導入の背景にあると考えられる。例えば、秋田大学では毎年おこなわれているFDワークショップには、教員とほぼ同数の学生が参加し、教員と学生混合のグループで活動するという試みが続けられている。これは、教育・学習の改善について検討する際に、学生から直接的に意見を聞こうという趣旨でおこなわれている。このような活動は他大学でもおこなわれており、「学生FD」等の名称で、教育・学習環境の改善に参画している事例が見られる（木野，2012）。

初年度（平成18年度）のピアサポは、初年次ゼミの各実施単位から2～3名ずつ推薦された学部生、大学院生が研修を受けて学習ピアサポ

ーター（以下サポーターと呼ぶ）となり、①初年次ゼミへの参加と学習支援、②ピアサポートルーム（一般教育1号館1階に設置）での相談受付の2つの活動を、4月から7月の期間に展開した。当初の2年間の活動状況については報告書（秋田大学教育推進総合センター，2007）、また採用したサポーターに対する研修や活動のガイドラインの整備に関しては、細川（2008）にまとめられているのでご参照いただきたい。

2-3. 平成18年度にピアサポ導入後の変遷

ピアサポの具体的な実施内容はマイナーチェンジを繰り返し、現状に合う形を模索してきた。まず、相談窓口（ピアサポートルーム）を設定した相談受付については、初年度は4～7月に実施していたが、利用者が学期当初に集中していたことから、2年目の平成19年度には4月、7月、10月に実施することとした。しかし、7月や10月は相談件数が多くなかったため、平成20～22年度は4月のみとした。

相談窓口の場所は、授業で利用する機会の多い一般教育1号館に設定し、医学部のある本道キャンパスにも設定して相談体制を整えた。しかし、多くのサポーターが長時間待機するのに見合うほ

どの相談件数はなく、検討の結果、各学科・課程ごとに相談場所・時間を設けた方が、1年次生としては相談しやすいとの判断に至った。平成23年度以降は全学的な相談窓口を設けず、各学科・課程ごとに、初年次ゼミ開講時間の前後に「ピアサポートアワー」を設けて相談を受けつけるとともに、電子メールによって相談できるようにした。

一方、サポーターの個性を生かすため、平成20年度からサポーター自身による「学習支援企画」を展開している。これは、学生であるサポーターの視点から初年次生のニーズをつかみ、そのニーズに応えるような学習に関する企画を考えるというものである。初年次生の履修状況により、企画によっては十分に参加者が集まらないものもあったが、多くの初年次生を集めて手応えをつかんだ企画もあった。例えば、サポーターによる研究分野紹介の例がある。初年次ゼミでは細分化された研究分野についての紹介が教員によっておこなわれている場合があるが、初年次生にも理解しやすいような用語を用いて、わかりやすく説明することは非常に難しい。そこで、実際に学んでいる学生の立場から、その研究分野についての紹介をすることを企画した。また別の例として、数学の補習や学習相談を受けつける企画をおこなったグループもあった。これは毎年初年次生が数学の学習で苦しむことを身をもって知っていたサポーターが、放課後に時間を設けて、授業で出された課題等について質問を受けつけるという企画であった。

これらの活動内容の変遷に合わせ、サポーターの研修内容についても検討が続けられた。サポーターの活動をおこなう上で必要な知識－例えば、本学の教育システムや教養基礎教育の構造、学習支援体制－を理解するだけでなく、新入生からの相談を受ける立場としての態度や基本的スキルの習得も重視した。具体的にはグループワークをおこなったり、教育相談の専門家の指導のもとロールプレイを交えた研修を取り入れたりしている。

現在は、平成26年度の学部改組によって、新入学生と2年次以上の学生で学科等の枠組みが異なる状況になる。先輩が後輩をサポートする文化を醸成することを目指してきたピアサポとしては、大きな転換点にあるといえよう。

3. 現在のシステム

3-1. 体制について

ピアサポートシステムは、全学運営委員会「教育活動部門」の活動の一部に位置づけられ、運営は教育推進総合センターの専任教員と事務職員がおこなっている（図2）。具体的には、センター専任教員の企画・立案・報告に対し、教育活動部門が助言・承認をおこない、それに基づいて事務職員が各学部・スタッフとの連絡調整や日程の調整をすることになっている。

ピアサポートのスタッフは、全学部各学科から2名ないし3名程度が選出されている。1月に教育推進主管から、各学部にはサポーター選出依頼をし、それを受けて学部の教員が選出をする。（図2）全体の傾向としては、教育文化学部・医学部は2年生から4年生までのサポーターが選出され、工学資源学部は大学院生が大半を占める。

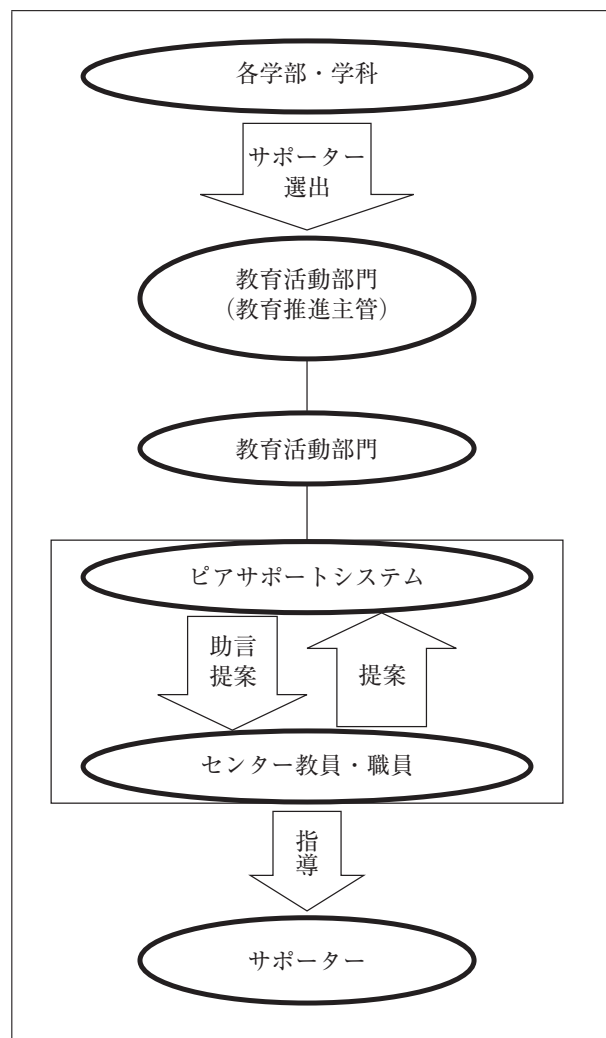


図2：学内におけるピアサポ組織図

3-2. 年間の流れについて

年間の流れは表2をご参照頂きたい。主要な点としては、新入生のニーズが高い4月から活動を開始するために、1月から組織的に活動をスタートさせ、2月のサポーター研修を経て、4月上旬には活動に対する準備ができている状況となっている。4月中旬以降の活動は各サポーターによって異なるため一任し、毎月活動報告書の提出が義務づけている。すべての活動が終了した8月に、報告会を開催し、活動がひと段落する。

表2. 年間スケジュール

時期	内容	部署
1月	サポーター推薦	各学部
2月	新旧サポーター引き継ぎ	学生
4月初旬	新サポーター研修（活動計画作成）	学生
4月上旬	活動計画提出・開始	学生
4-7月	活動	学生
毎月	活動報告書提出	学生
8月	活動報告会	学生・学部教員

3-3. 活動例

基本的にサポーターは初年次ゼミに参加し、様々な角度から新入生の支援をするが、それに加えて各サポーターの特色を生かし、学習支援活動を企画することになっている。平成25年度の活動例は表3をご参照頂きたい。各学科の特色に合わせ、毎年さまざまな活動が実施される。活動計画は、2月の新旧サポーター引き継ぎの際に、まず、旧サポーターから実際の活動内容を発表してもらい、それをもとに新旧サポーターが意見・情報交換をおこなう。そして、4月初旬の研修の際に、各サポーターが案を持ち寄り、センター教員と協議のうえ、研修内で推敲し、完成させる。（表2）

表3. サポーターによる学習支援企画の活動例

内容	学科等
先輩の大学生活や目指す職業の話聞く	障害児教育
カリキュラム相談会	発達科学・人間環境・材料工学
留学・教員免許・レポートの書き方についての情報提供	国際言語文化
コース選択相談会	地球資源
研究室案内	環境応用化学・生命化学・情報工学
大学院紹介	電気電子工学

工学資源学部は、学科により特徴・特色が異なるため、研究室訪問などが多くおこなわれる。入学して間もない新入生にとっては、個人的に気軽に情報収集することは難しいため、有意義であると思われる。大学院生がサポーターを務める場合が多いため、一年次から四年次までの流れを広い視野で考慮にいたしたうえでの支援が可能になっている。

医学部保健学科は、伝統として上級生と新入生の密な交流が存在し、その流れがそのままピアサポのシステムに反映されている様子が見受けられる。入学直後の新入生にとって、助産師の資格取得などの取得方法も気軽にかつ丁寧に教えてもらうことができる貴重な機会である。

教育文化学部の学校教育課程障害児教育選修では、学生の人数が多くないという利点を生かし、同様に上級生と新入生の関係も密接になることのできる文化が存在し、理想的なシステムとなっている。国際言語文化課程では、新入生の多くの興味をひく留学や教員免許関連の情報提供企画を実施した。とくに、留学は1年次から計画的に準備を始めなければ困難になるため、新入生にとっては貴重な機会である。

高校までの学校教育では、生徒は多くの場合、すでに決まっているカリキュラムに沿って、「敷かれたレールに乗って」進級する。文系や理系の選択の際も、保護者・担任との相談のもと決定するため、自ら選択をし、行動することに慣れていないように思える。大学生活においては、すべてが自己責任であり、手取り足取り懇切丁寧に教えてもらえるわけではないため、突然そのように環境が変化しても対応しきれない場合もある。それゆえに、その「橋渡し」としてのピアサポの活動・企画は今後も重要性を増すことになると考えられる。

3-4. 現在までの改善点

システム改善として、以下に説明する3点を重点的におこなってきている。まず、本システムは、学生が学生をサポートするという理念に基づき、システムが効果的に働くようにフレームワークを作成しているため、教員は直接的ではなく間接的な形で支援する形をとっている。例えば、サポーターの意識づけを「間接的」におこなうこと

で、ピアサポシステムに「直接的」な効果をもたらそうという狙いがある。開始数年は、サポーターの意識に温度差があり、活動自体も積極的なケースもある一方で、形式上実施しているようなケースが存在していたことは否めなかった。そのため、4月の研修段階から、「過去の問題点として、学生の意識の低さがあったこと」を明確に伝え、ピアサポの目的や意義を学生一人一人が考えることを強調した。

次に、サポーターができるだけスムーズに活動できる枠組みを構築した。従来は新旧サポーターが直接討論する「引き継ぎ」の機会はなかったが、旧サポーターには2月の新サポーターの顔合わせの際に一緒に参加することを義務づけ、引き継ぎをおこなうことにした。言い換えれば、サポーター内での「ピアサポート」も実施したのである。このことによって、過去の成功・失敗が直接受け継がれ、毎年サポーターがゼロから考える必要がなくなった。さらに、6月の中間報告会、8月の最終報告会も、当初は参加率が悪かったため、8月に一本化し、全員が参加することを義務づけた。実際、参加率に急激な伸長がみられた。

最後に、新入生のピアサポ自体の利用が低迷していたことから、「実施時期」と「ニーズ分析」の再検討に焦点をあて、学生目線になるよう、サポーターに実施時期を一任し、ニーズ分析も必ずおこなうようにした。そして、ニーズ分析→計画→実行→検証の流れを作った。その結果、利用の増減の可視化と理由検討が可能になった。

3-5. 現在の問題点と今後の課題

以上の現状分析をふまえ、依然として以下のように、主に3つの問題点が挙げられる。まず、学科によっては、新入生のピアサポの利用が少ない点である。前述のように、その理由は以前より明確になっているが、時代の変遷とともに、ニーズも変化する。ニーズ分析をさらに精緻化させ、それに基づいて手立てを作成していくことが必要である。また、利用率が比較的高い学科においても、さらなる利用が可能になるような工夫をし、つねに前に向かっていく姿勢を身につけさせたい。

次に、学内におけるピアサポに対する認知度および理解度をあげるための工夫が必要である点である。現在の状態では、教員とサポーターがスムー

ズな意思疎通を図ることができなかつたり、ピアサポの認識が誤解されていたりしたケースがみられた。今後は、教育推進総合センターとして、各学部教員に対し、サポーター全体の認知度の向上を図り、積極的な支援が得られるよう努めたい。

最後に、学部改組と、新学部設立により、現行のカリキュラムが新カリキュラムに変更される点である。それに伴い、現在のピアサポ自体も、大幅な変更をする必要がある。大枠としてのシステムは出来上がったが、それを土台として細かい点をまた作り上げていくことが早急の課題となる。

4. おわりに

本論文では、設立から8年を経過したピアサポートシステムの軌跡と、現状、そして、今後の展望について報告した。論文内で報告できるのは、ピアサポについての、「目に見える部分」のみである。実際に、その「目に見える」企画や実例のおかげで、新入生の役にどの程度たったかは測る事ができないが、むしろその「目に見えない可能性」の部分が大切なのではないだろうか。目に見える数字や結果という「直接的」に観測できるデータに基づいて、失敗・成功を判断するのではなく、その直接的な視点からは見えない「間接的」な効果を大切にしていくことが、ピアサポの今後の発展には欠かせないと考えられる。

日本には、欧米とは異なり、独自の「先輩後輩」の文化が存在する。よい意味での「先輩後輩」の文化を継承し、「先輩」が「後輩」の学生生活を支援する、という形は、角度を変えれば、同じ大学で学業に励む者同士が、「ピア」として、サポートし合うという理想的なキャンパスライフなのではないだろうか。新入生というピアを支援する過程のなかで、上級生がまた成長することもできるというピアサポシステムを作っていきたいと思う。

引用・参考文献

- 秋田大学改革関連資料集編集委員会（編）（1999）『秋田大学改革関連資料集』
- 秋田大学教育推進総合センター（2007）学習ピアサポート・システム活動レポート：先輩学生による新入生の学びの支援（報告書）
- 濱名篤（2006）日本における初年次教育の可能性と課題、濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』、丸善、pp.245-262

- 濱名篤 (2007) 日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果, 大学教育学会誌, 29-1, pp.36-41
- 細川和仁 (2006) 大学生にとっての授業・指導と学習支援, 秋田大学教養基礎教育研究年報 8, pp.1-9
- 細川和仁 (2008) 初年次教育における学習ピアサポート活動, 秋田大学教養基礎教育研究年報, 10, pp.1-9
- 川嶋太津夫 (2006) 初年次教育の意味と意義, 濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』, 丸善, pp.1-12
- 木野茂編『大学を変える, 学生が変わる－学生FDハンドブック』ナカニシヤ出版
- 耳塚寛明・牧野カツコ編『学力とトランジッションの危機－閉ざされた大人への道』金子書房, 2007年
- 溝上慎一編『大学生の学びを支援する大学教育』, 東信堂, 2004年
- 田中毎実 (2002) 「大学の学校化－大学教育改革の行方と教育理論－」, 藤田英典・黒崎 勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育学年報 9・大学改革』, 世織書房, pp.95-112
- 山田礼子『一年次（導入）教育の日米比較』, 東信堂, 2005年
- 山田礼子 (2006) 日本版初年次教育構築のために, 濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』, 丸善, pp.57-68